

美しく老ゆる

小此木通孝

四十年余りお世話になったNHKを離れて昨年から家裁の調停委員という人間関係調整の難かしい仕事を仰せつかったのを機会に、人間関係のことを世界のことわざや金言詩句などから拾いあつめてみた。一々もつともなものばかりで徒らに馬鹿を重ねてきたのを恥じるばかりだが、ともあれいまは「美しく老ゆる」というのが究極の目標のように思っている。

「うかうか三十、きよろきよろ四十」

「人ごとのような五十が来てしま」

「四十歳は青春の老年、五十歳は老年の青春」とあり、「男の年は気持の通り、女の年は顔の通り」「男は墓場が近づくから老いを恐れ、女は誕生日から遠ざかるから老いを恐れる」などのことばもあり、「老いは人生の通過点に過ぎない」とすれば「白髪は染められても老いは染まらない」ことを悟らねばならない。

「誰でも年をとるが、年よりとは呼ばれたがらない」というものの「老年にな

って成長するものは爪と貧欲」とか「老齢を堪え難くするものは精神と肉体の衰えでなく思い出の重荷である」「老年の悲劇は彼が老いているところになく、まだ若いと思うところにある」と教えてくれている。

川柳でも「子は当てにならぬと少し知る五十」「老いては子にしたがうそんな世ではなし」「自慢した子にうとまれて生き残り」などから「チャネルのように人生変えられず」とか「一生を脇役でいてつづがなし」などがつづいた句もある。

「鷹のつらきびしく老いて衰れなり」

(鬼城)「生かなし晩涼に座し居眠れ深る」(虚子)の俳句もあれば、仙居和尚作の有名な老人六歌仙には「聞きたがる死にはながる淋しが、心は曲る欲深くなる、くどくなる気短かになるぐちになる、出しゃばりたがる世話やきたがる」とある。「いかにして年をとるかを知ることが知恵のうちの最大の仕事である」ときけば、「寿命とは単に呼吸している時間の長さではない、幸福を噛みしめる時間の長さである」また「壮にして学べば老いて衰えず老いて学べば死して朽ちず」などのことを教えるとして、「晩晴」の字句のとおり「賢く老い美しく老い」子供や孫はもとより世間から「おしゃれなおじさん、きれいなおばさ

ん」と言われるのが理想ではないかと考えているがながいものである。

(元熊本中央放送局長、現NHK会友)

マナスル登頂

本田節子

八百五十六メートル、世界で初めてのマナスルの頂上に立った女性にお会いした。

内田昌子さんである。

お会いする前は、どんなにかつい山女であろうかと、恐れをなす思いもあったのに、現実私に私の目の前に立つ女性なんと小柄でやさしい感じであることよ。

身長百四十九センチ、体重三十八キロ、三十三歳、しかも四才の子のママである。

随分と見上げてのインタビュになるだろうなあ、と不安であったのに、むしろ下り気味の視線に、最初から背負い投げをくわされた。しかも、荒っぽい山言葉でもとび出すかと思えば、何ともなごやかな京都弁である。

随

想

「失礼ですけど、意外と小柄でいらっ
しゃいますね。」

「みなさんそう言われます。」

さすがに、しんのある声である。

だが、この人が本当に、到達高度世界記録を打ち立てた、栄光の持ち主だろうか。どう見直しても不思議である。しいて何かを探すとすれば、雪焼けしたその顔色であろう。ひと皮もふた皮もむけたらしい皮膚の色に、私はマナスル頂上の雪の反映を探し得た。

十年間の前準備と、夫と子供を置いての、四ヶ月半の現地逗留、ミクロとあだ名のある三十八キロの体に、三十キロの荷を背負って、空気の稀薄な中で、人間の限界への挑戦。

にっこりと微笑む内田さんの、どこにそれだけの強靭さがあるのか。精神力の威大さと、その秘めた底力を探しつづけるかのように、次は次々と質問してみた。

しかし、その返事は、いとも平凡な答であった。

「努力と忍耐です。」

世界一の壮拳だからといって、世界一の特別メニューはなかった。彼女の言葉は続く。

「現地隊員は十一人でしたが、内地にいて陸の仕事をし続けてくれた他の仲間や、家族、友人、そしてシェ

バやポーターなど、多くの方々の支えがあったからこそです。」

頂上だと思つて立つた頂が、ニセ頂上だと見破つたのも彼女である。シェルパのジャングーはこも同じだといったという。しかし中世古登はん隊長と彼女はそれから一時間半後の本ものの頂上に、しっかりと日の丸の旗を立てたのである。しかも最後の二百メートルは、酸素ボンベもないままにである。

後一步、後一步と踏みしめながら歩く極限状態の中で、彼女は何を考えていたのだろうか。

鈴木貞子隊員の遭難に言及した時、にこやかな顔に悲痛な傷みははしり、絶句した彼女の伏せた目は、今もヒマラヤの雪に眠る友への想いに満ちていた。

小さな可愛い感じの人と思つた彼女が、インタビュが終る頃は、背骨のしんとした、大きな身体に見えてきたから不思議である。

牛深の印象

田口嘉津義

この四月、突然転勤を命じられ、初めてこの牛深の土を踏んでから、三か月余

り経った。多忙であわただしい四か月だった。中でも大きな出来事は学校の全面移転であった。牛深高校は、永年の宿願が叶い、紆余曲折の歴史に終止符を打ち、狭隘かつ貧弱な校舎校地から解放されて、五月半ば、四軒離れた久玉湾の埋立地に、新築移転した。これから永久に、牛深高校の位置がこの地に定まることを思えば、これはまさに歴史的な出来事であるといつてよからう。残された工事が完了すれば、碧い久玉湾の一角に、おそらく県下に類を見ない美しい学園ができあがるはずである。

新任地の牛深の人々は、純朴で極めて人情に厚いということである。都会風の突き放すような冷たさがなく、親切で人懐く、話している心の温まる思いがする。対するこちらも自然そうならざるをえない、といったぐあいである。街で買い物をして、それを感じる。何しろ、牛深は天草の最南端、僻遠の地であるため、かえって都会の侵蝕から免れているためであろう。これは、これから当分の間、この地に住みつかなければならぬ私にとって、何よりも一番嬉しい発見であった。当然、生徒も素直で、父兄もまた実意がある。こんなことがあった。生徒が、学校で些細といえれば些細な不始末をしたその夜、そのお母さんが訪ねて来た。私の新しい宿舎がわからず、訪ね訪

ねして、四軒の夜道を歩いて来た、というのであった。「子供が悪かつしませて、申しわけありません。オヤジは出稼ぎに行つておりましたけん、私があがりしました。オヤジが帰りましたら、お詫びにやります。」額に汗をにじませ、恐縮しながら訥々と話すその姿は、着任間もない頃の私に、何か強い印象をあたえたものである。